

(56)1105 「わたしの ASAIO」 081505 締め切り

081505 提出

ASAIO は、学術上の目標

2005 年 6 月 7 日から 11 日まで米国ワシントン DC で開催された第 51 回 ASAIO に出席してきました。ASAIO は、American Society for Artificial Internal Organs (米国人工内臓学会) の略です。医師になって 40 年以上の間人工臓器研究開発にかかわってきたものとして、ASAIO には単なる「思い出」以上の「思い入れ」があります。この学会には、長年にわたってほぼ毎年出席していたのですが、東京女子医大を定年で辞める 2・3 年前から、「もういいか」という感じで出席していなかったのです。

2005 年の学会には、Kolff が出席されてきました。Disposable twin-coil artificial kidney と名付けられたプラスチックを使用した使い捨て型人工腎臓を市場に出し、今日のような透析療法の臨床応用に功績のあった研究者です。93

才でした。出席者の多くは、彼に気がつか
なかったよう（もはや世代交代していて知らない？）
でしたが、1960年代の50才を越えたば
かりのKolffに代表されるASAIOこそは、その発
表内容からお手本として参考にし、いつの日
か追いつきたいと思った学術上の目標でした。

ASAIOという学会があるのを知ったのは、北
大第一外科に入局して間もなくですから1960
年代の初めのころだったと思います。ASAIOは
今年が第51回なので1955年に設立され、日本
人工臓器学会の前身、人工内臓研究会が設立
されたのが1962年でした。1ドル360円の時代
で、外貨の持ち出しは厳しく制限されていた
ので海外の学会に出席することは難しく、も
っぱらタイプ印刷された紙をプラスチック
のスパイラルでとじたtransaction（会報）が1
～2年後に入手できるのを頼りにしてしまし
た。当時、transactionには口演演題の論文が載
っており、各論文の後には生の質疑応答がテ
ープから収録され記録されていきました。その

中で、日本人の某先生の討論に、「He answered in Japanese」と記録されたのがありました。勿論、彼は英語で答えた筈でした。

最初に、実際に出席できたのは1966年アトランタのエモリー大学に留学中のことでした。直前にアトランティックシティーで他の学会があり、医局の先輩能勢之彦先生（当時クリブランドクリニック、現ヒューストン・ベイラー大学教授）と落ち会って、もう1人アメリカ人を乗せてアトランティックシティーからニューヨークまでレンタカーのフォルクスワーゲンで移動しました。お金を節約するためでした。かなり窮屈だったはずですが、若かったせいか、あまり苦になった記憶はありません。

演題採用が厳しかった ASAIO

1960～70年代には、日本人研究者が提出する演題はなかなか採用されませんでした。抄録集には、提出された演題抄録がすべて収録

されており，そのうちスライドセッションでの採用分には2つ黒星，ポスターセッションでの採用分には1つ黒星（逆だったかな？）がついているので採用の状況がわかりました。ひところは，採用される演題数は提出される演題数の3分の1から4分の1という厳しさでした。その中で採用される日本人研究者の演題は、また比率的にも少なく，研究内容よりも英語発表力によって差がつけられているのではないかと僻んだものでした。

人工臓器研究の3本の柱は，循環器・代謝（主に腎臓）・材料関連とされていましたが，1960～70年代には，人工腎臓・透析関係の演題が主力を占めていました。出席者には，看護婦さんも多く，結構華やいだ雰囲気もありました。EDTA（ヨーロッパ透析移植学会）のように、看護婦さんと一緒に会を継続すべきだとする意見もあったのですが，採用されませんでした。

ASAIO 出席後には、医療施設見学

日本の透析医療の成長期でしたから、10人から20人のツアーのグループが多いときには5組位もASAIOに出席し、会場内をまわってぞろぞろと移動するものですからちょっと異様といえは異様でした。ツアーグループは学会の後でアメリカ透析施設を中心に、観光もちょっと加えて旅行するのが流行（はやり）でした。昨今ほど、海外旅行が自由で一般的な時代ではありませんでしたから、学会出席後の医療施設の見学ツアーが、単に新しい医学知識を取り入れる機会になったばかりでなく、アメリカ在住研究者との直接的な意見交換を通じて人脈づくりにも作用し、その後留学の機会を得た日本人研究者も大勢いました。

その意味では、ユタ大学のKolf研究室とクリブランドクリニック、次いでベイラー大学の能勢研究室は、「なんとか詣で」の標的になっていたといえるでしょう。

1980年代以降になって、人工腎臓・透析関

係の発表が米国腎臓学会に移動し始め，なんとなく全体の出席者数も少なくなる傾向が目立つようになりました。このころ，ASAIOの有力者であるDr. Friedmanに「以前のように日本人の出席者を多くするにはどうしたらいいか」と相談を受けたことがありました。「日本人研究者からの演題採用を増やしてくれるように」と進言したのですが，実際にどうなったかはわかりません。ASAIO開催の場所も，ニューオーリンズだったり，ディズニーランドだったり，学会出席に加えて，前後の観光がお楽しみといった雰囲気もありましたが，最近ではワシントンDCとシカゴが交互に開催都市となっているようです。ついでながら、アメリカの大都市での学会開催は，9.11テロ以後どの学会でも不人気だと聞いています。

Kolffが司会をしているときに演者が口演時間をオーバーしたことがありました。Kolffが注意をしたのですが，発表者が口演を継続したのに対して，Kolffが怒鳴って口演を無理無

理止めてしまったことがありました。Kolff は大変時間に厳しい人とは聞いていましたが、びっくりしました。

装着型人工腎臓の臨床と DFPP

わたしも、せっせと演題を提出していましたが、そのうちに採用されることもあるようになりました。その中で1つの思い出は、1979年に、「(経口的体液希釈による)装着型人工腎臓の臨床」のムービーに対して、「movie of a year」の賞をもらったことです。当時、10数分の16ミリムービーを作るのに百万円ぐらいかかりました。東京女子医大の写真部で作った全くの手作りでした。

もう一つは、1980年にDFPP(二重濾過血漿分離交換)のASAIOでの初めての発表のときです。実は、この演題は前年には不採用となっていました。プログラム委員会が、内容の重要性を理解していないのだと思っていました。口演発表前になると、聴衆が会場にぞろぞろ

入ってくるのがわかりました。口演後には、初めてで、そしておそらく最後のスタンディングオベーションで感激しました。会場の外で、Harvard大学のMerrill教授に会ったところ、「あれは良いプレゼンテーションだった」といわれて、またまた感激しました。

同じころ、やはりDr. OreopoulosのCAPDの最初の年の演題が採用されず、次の年に採用されて、世界的な大反響を呼んだことがありました。ASAIOのプログラム委員会だって、初出演題の内容の将来的重要性を判断できないこともあるのだと思えば、気も楽になるというものです。

つまらなくなるアメリカの観光地

ワシントンDCでの学会の隙間に、ポトマック河の対岸にあるOld Town of Alexandriaへ行ってきました。20年以上も前に、墓地で水彩画を描いた記憶があり、炉辺医話の挿絵に使ったことがあります。しかし、街も港も現代風に

きれいに整備されてしまっていて、かえって昔の風情がまったく失せていました。

ワシントン DC の中の住宅地ジョージタウンには、レンガ造りの建物を積極的に残してあるようなので、期待して Alexandria へ行ったのがっかりしました。ジョージタウンで面白いのは、街角を曲がると次から次へと各国の大使館などが現れることです。現在200以上の国あるそうですが、聞いたこともないような国の国旗を見ることができます。

Church と science が同居するアメリカ

ところで、ワシントン DC の中で面白いものを発見しました。交通信号で立ち止まったところ、Church of Scientology と書かれた建物が気がつきました。scientology は造語であることは分かりましたが、church と science は本来相容れないもののはずです。なにやら、胡散臭い感じがして見回していると、中から人ができて入るように勧めます。好奇心から中へ入ってみ

ると、教会らしくもあるし、展示場らしくもあるしという不思議な雰囲気です。そのうち説明を受けて状況がわかりました。日本語版もある、なにやら経典らしいものを見せられると、「身体的な不健康は、現代のストレスからくる」というようなことが書いてあります。新興宗教、オカルト集団と聞いていいかもしれません。

日本へ帰ってから、数日して新聞に、トム・クルーズとトラボルタが熱心な信者だと書かれていました。アメリカってとっても不思議で、おもしろい国です。

挿絵：ジョージタウン

おそらくは意図的に残されている old fashion の大きな樹木に護られた木造の家、というよりは家並みが目に付く住宅街があります。路も煉瓦作りで、和やかな落ち着いた雰囲気が漂います。

